

「空白の天気図」 ～心に刻む～

柴原布早子

昭和二十年九月十七日、九州南端の枕崎に上陸し、九州・中国地方を縦断した後、再び東北を横切っていった枕崎台風。この台風による広島県下の死者・行方不明者は二千人余と突出して多く、上陸地九州全体の犠牲者四百四十人をも上回っています。昭和三十年代、NHK記者として広島に赴任していた若き日の柳田邦男さんはこの事実衝撃を受け、膨大な取材ののち、この「空白の天気図」を執筆されました。

真珠湾攻撃の後は「天気予報」というものもなくなった気象管制下の日本。通信事情の悪化に伴い、気象台への各地からの観測データ入電は極端に少なく、等圧線も高気圧も低気圧も記載できない「空白の天気図」となって行きます。八月六日に被爆した広島でも、江波山の気象台員たちは負傷をおして懸命に観測や予報を続けようとします。「観測精神」と称されるこのプロ意識には実に頭が下がります。しかし南からの情報もなく通信回線も防災機能も麻痺した街で、伝達する手段もないまま、空前の規模の台風が広島を通過して行ったのです。

長いあとがきの中に、「原爆で焦土と化した広島を襲った情報途絶下の災害—それば、人災などという陳腐な表現をはるかに超えた現代の事件であった。」とあります。続いて、「それは昭和二十年九月十七日の事件であったが、核時代に生きる我々にとって、いつなんどき同じ状況下に置かれるかもわからぬという意味で、まさしく現代の危機を象徴する事件であると思う。九月十七日を記録する意味はそこにある。」と書かれています。出版されたのは昭和五十年、原爆から三十年目の夏なのですが、このあとがきに、あの三月十一日以後を生きる私たちは、特別の思いを抱くものです。

この三月、仕事で柳田さんをお招きし、講演していただく機会がありました。柳田さんといえば原発事故、少し前は脳死や航空機事故に関する専門家として有名ですが、最近は「絵本」を勧める講演にも力を入れておられます。現代における「いのちと心の危機」を活動のテーマとしておられる柳田さんには自然なことなのでしょう。講演会の準備中に、不明にも初めて出会ったのがこの「空白の天気図」でし

た。初版の単行本から文庫化され、ノンフィクションの宿命として絶版になっていたのですが、3・11を機に文庫として昨年秋に復刻されたのです。核兵器と原発は違うのか？ 否、放射能の被害を受けた者の悲惨を見るならば違うところなどない。命を奪われ、生きる場を奪われるという点で、何の違いもない、と「核と災害」というキーワードで復刻や書き下ろしを続けておられます。

*

櫻井先生が、夏が来るたびに読み返す沢山の本のことを仰っていたのを思い出しています。その際、ヴァイツゼッカーの「心に刻む」という語を使っておられたことも。

時間をかけて読むことも、心に刻む手立ての一つかな、と思います。単に事実を「知る」だけならば、記録された数値を見たり、まとめに眼を通すほうが能率的です。そうではなく自分の持ち時間を割いて、つまり自分の人生と引き換えにしながらそれを味わうことで初めて「心に刻む」ことができるのでしょうか。私にとっての「刻む」、ある年は「夏の花」、ある年は小川清兄ご紹介の「絶後の記録」（小倉豊文氏）が印象的でした。また、亡くなった西名一彦兄が貸してくださった（というより、読みなさい！という命令だったような。）「撫子（なでしこ）」は、子どもが主人公なものですから、特に辛い読書になったことも思い出しました。

柳田さんは、広島という街の持つ不思議な力によって書かずにはいられなくなった、と言われます。読む側も、正面から向かい合うことは大きなエネルギーを要することですが、夏の広島のもつ空気に助けられて、今年も「心に刻む」ということができれば、と願います。平和聖日の小湊玲子姉のお話も、そのような思いで伺いたいと思っています。